

マルコによる福音書 7 章 24 節～30 節

2016 年 5 月 26 日

古本 靖久

1、聖歌 474 番 「望み満つる わが主よ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 75 ページ）

4、テキストの位置

前回、イエス様は食物規定について語り、神さまがつくられたものには汚れたものなどないと宣言しました。

また「汚れ」についても、外から入ってくるものではなく、人間の内側から出ていくものだと指摘されました。

福音は外の世界へ	6:6b-13	弟子たちの派遣
	6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される
	6:30-44	食事の奇跡
	6:45-52	水の上の顕現物語
	6:53-56	まとめの句
	7:1-13	父祖たちの伝承とは
	7:14-23	旧約聖書の食物規定
	7:24-30	福音は異邦人の元にも
	7:31-37	デカポリスでのいやし

今日の箇所は、イエス様が異邦人の娘をいやす物語です。しかしいやしの場面が中心ではなく、聖書ではイエス様と女性との対話に焦点が当てられています。

この対話を読んでいくと、一見イエス様はとても冷たい言い方をしているようにも思えます。この物語を通して、聖書は何をわたしたちに伝えようとしているのでしょうか。そしてこの出来事は、教会にとって何を意味しているのでしょうか。見ていきましょう。



5、節ごとに

◆福音は異邦人の元にも

7:24 (さて) イエス (彼) はそこを立ち去って、ティルスの地(地方)に行かれた。(そして) ある家に入り、だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった(隠れていることができなかった)。

6章の終わりに、イエス様はゲネサレトで病人をいやしました。その後前回までの場面で、ファリサイ派の人々とエルサレムから来た数人の律法学者と論争をしていきました。

今日の箇所はそこから北に位置する港町での出来事です。ティルスという地はフェニキアの一都市であり、フェニキア人が住んでいました。

つまりイエス様は、ユダヤ人だけが住む場所ではないところに行かれたのです。しかしその目的は、宣教ではありませんでした。「だれにも知られたくないと思っておられた」とある通り、心と体を休めるために、人目を避けようとされたのかもしれませんが。

しかしイエス様は隠れることができませんでした。その状況は、ガリラヤで人々が家の戸口まで押し寄せてきた場面を思い起こさせます。

7:25 汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエス (彼) のことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。

やってきたのは、一人の女性でした。彼女の娘は汚れた霊に取りつかれていました。会堂長ヤイロの娘をいやしたときと同じように、本人ではなくその親が、願いをかなえてほしいとイエス様のもとに来ました。

時代や場所が違っても、子を思う親の気持ちは変わりません。イエス様のうわさをどこから聞きつけたのかはわかりませんが、彼女はイエス様のもとに来ました。



イエスが宣教した町々

7:26 女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出して
くださいと（彼に）頼んだ。

彼女はシリア・フェニキアの女性でした。この時点でユダヤ人ではないということがわかります。さらに聖書は「ギリシア人で」と重ねて言います。

彼女はフェニキア人でしたが、生活様式や言語、そして宗教に至るまで、ギリシア的な生き方をしてきたということです。つまりユダヤ人から見たら、彼女は異邦人であり、異教徒でもあります。ユダヤ人の枠の外にいる女性なのです。

7:27 （すると）イエス（彼）は（彼女に）言われた。「まず、子供たちに十分（満腹するまで）食べさせなければならない（なさい）。子供たちのパンを取 \rightarrow （りあげ）て、小犬にや \rightarrow （って）は（やるのは）い \rightarrow （け）ない（よくないことだ）。」

このイエス様の言葉に、不快感を感じる人もおられるかもしれません。このような言葉を本当にイエス様が言ったのか、福音書を書いた人が勝手に創作したのではないか、そのような議論も実際にありました。

ここに出てくる「子どもたち」は「ユダヤ人」を、「小犬」は「異邦人」を指します。またパンは命を与えるもの、すなわち福音や救いといった意味を持ちます。したがってイエス様は、このように言っていることになります。

わたしはまずユダヤの人々に福音をしっかりと伝えなければならないのだ。その途中で、異邦人のために救いを宣べ伝えるのはよくない。

イエス様は、ご自分の宣教はイスラエルの人々のためであると、明確に言われたのです。しかも「小犬」という蔑称まで使って、異邦人を侮辱までするのです。

この背景にはユダヤ人の小作農民が、農作物を異邦人に搾取されていたという事実が隠されていると、指摘する人もいます。貧しい農民がいつも裕福な都市の人々によって虐げられていた状況をイエス様は見ている、「食物どころか福音まで奪おうというのか」という気持ちを持ったというのです。

ともかく、イエス様はとても厳しい言葉を女性に返しました。彼は冗談半分で言ったのでしょうか。彼自身が自分の宣教の範囲を広げるのかどうか、悩んでいたのでしょうか。それとも、女性の信仰を試みたのでしょうか。

7:28 ところが、女は答えて（彼に）言った（う）。「主よ、しかし（その通りです）、食卓の下の小犬（たち）も、子供（たち）のパン屑はいただきます。」

新共同訳聖書の訳では、女性は「主よ、しかし」と口答えをしているように書かれています。しかし直訳では、「主よ、その通りです」と、イエス様の言った言葉を肯定しています。

イエス様が言うとおおり、ユダヤ人は子どもたちで、自分たち異邦人は小犬でもいいのです。その上で彼女は言います。子どもたちのパンを取り上げて、自分たち小犬に寄こしてくれとは言いません。子どもたちがパンを食べたときに、食卓からパン屑が落ちたら小犬がそれを食べるように、わたしにもパン屑をいただけないでしょうか。

わたしたちにもこの謙虚さを思い起こすことが必要なのではないのでしょうか。 祈り書には陪餐を受ける直前に、この女性の行動をもとにしたお祈りがあります。「近づきの祈り」と呼ばれるものです。

憐れみ深い主よ、わたしたちは自分のいさおに頼らず、ただ主の憐れみを信じてみ机のもとに参りました。わたしたちは、み机から落ちるくずを拾うにも足りない者ですが、主は変わることなく常に養ってくださいます。恵み深い主よ、どうかわたしたちが、み子イエス・キリストの肉を食し、その血を飲み、罪あるわたしたちの体と魂が、キリストの尊い体と血によって清められ、わたしたちは常にキリストにおり、キリストは常にわたしたちにおられますように

アーメン

わたしたちは、自分のいさお（功績）ではなく神さまの憐みによってのみ、恵みを受けることができるのです。本当だったら主の食卓にはふさわしくない者なのかもしれません。しかし神さまはわたしたちを必ず養ってくれるのです。

これからこの「近づきの祈り」を祈るときには、その彼女の気持ちに自分の思いを重ね合わせてはどうでしょうか。



7:29 そこで、イエス（彼）は（彼女に）言われた。「それほど言うなら（その言葉で）、よろしい（十分だ）。家に帰りなさい（行きなさい）。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった（行った）。」

ここも新共同訳聖書の訳では、「それほど言うなら」とイエス様が女性の言葉に根負けしてしまったかのような印象を受けます。しかし直訳では「その言葉の故に」となり、「その言葉で十分だ」と彼女の言葉を肯定しているのです。

イエス様は彼女の発言を高く評価しました。その熱意と信仰を、イエス様は喜んだのではないのでしょうか。



27 節のところで、イエス様はなぜこんな厳しい言葉を女性に投げかけられたのだろうという疑問を持ちました。しかしこのやり取りを見ると、イエス様は彼女の信仰を試されたのではないかと思います。この問答によって彼女の信仰を引き出したという言い方のほうが近いのかもしれませんが。

彼女の娘から悪霊は出ていきました。彼女の言葉によって、救いのみ手が異邦人にも伸ばされた瞬間でした。

7:30 （そして）女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており（伏しており）、悪霊は出てしまっていた。

イエス様は離れたところから、娘をいやしました。このことは、とても簡潔に書かれています。つまり今日の箇所ポイントとなるのは、娘がいやされたことではなく、女性が信仰を言い表したことです。

その結果、ユダヤ人と異邦人との隔ての壁は、崩されていきます。この事実は、聖書を読むユダヤ人キリスト者にとって大きな意味を持っていました。イエス様自らが、異邦人に手を差し伸べたという出来事によって、自分たちも同じように、すべての人たちのところに遣わされているのだという思いを持たされたのではないのでしょうか。

<今日の箇所から>

イエス様はイスラエルの民を救うために来られました。そのことは旧約に預言されていましたし、またイエス様の活動を見ても明らかでした。

しかし、一人の女性の信仰がその壁を打ち砕きます。彼女の行動によって、人々を分断していた偏見や境界線は崩されていきました。

この物語を読むときに、わたしたちは自分たちが「ユダヤ人化」していないか考えることが大事だと思います。わたしたちはもともと救いの中に入れられていなかった異邦人のはずなのに、自分たちこそ救われて当然だと感じてはいないでしょうか。神さまの憐みによってわたしたちは生かされているのに、そのことを忘れてはいないでしょうか。

教会には様々な人が訪れます。自分たちと異質な人たちは受け入れずに、同じ考えを持つ人とだけ交わっていたなら、こんなに楽なことはないでしょう。初代教会においても、外に向かって宣教するのか、それともユダヤ人にだけ福音を宣べ伝えるのかという議論が起こったと、使徒言行録には記されています。

イエス様が異邦人にも救いの手を差し伸べられたこと。このことは、わたしたちにも「外に向かって宣教せよ」と命じているのではないのでしょうか。

また、女性の信仰にも注目してみたいと思います。彼女は娘をいやしてほしいという一心で、イエス様の元に来ました。そこには、たくさんの壁が存在していました。性別・宗教・民族、それらの壁を乗り越えるのは、大きな勇気が必要だったと思います。

イエス様は彼女の受け答えを良しとされました。しかしその言葉だけではなく、彼女があらゆる壁を乗り越えた勇気についても、良しとされたのではないのでしょうか。

わたしたちの祈りもそうなのです。わたしたちが執拗に祈り、衣にすがりつくほどの信仰を見せるときに、イエス様は言われます。「その言葉で十分だ」と。

今回の学びはこれで終わります。次回は6月23日(木)10時30分からです。「デカポリスでのいやし」(マルコ7:31~37)について学んでいきます。